

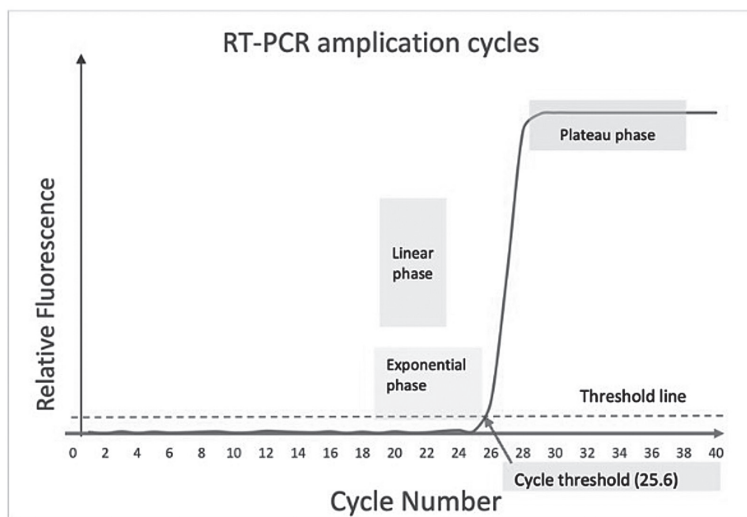
第7章

「ワクチンより自然免疫の方がいい」

—ファイザー社員、隠し撮りを知らずに思わず告白

Understanding cycle threshold (Ct) in SARS-CoV-2 RT-PCR

Figure 1 demonstrates the stages for RT-PCR post run analysis.



イギリス公衆衛生局 (PHE)

「PCR検査の増幅回数 (Ct 値) は25以下であるべき」

file:///C:/Users/terashima/AppData/Local/Temp/Understanding_Cycle_Threshold_Ct_in_SARS-CoV-2_RT-PCR_.pdf

第1節 PCR検査は感染者数をふやす「魔法の杖」^{つえ}

1

私は前章で、「ワクチン優等生だったイスラエルが、感染を防ぐどころか逆に増やしているのです」と述べながら、次のように書きました。

ではワクチンを2回接種したにもかかわらず、なぜ感染者が増えるのでしょうか。それには二つの理由が考えられます。

(1) PCR検査の増幅回数を操作して、3回目の「ブースター接種」を受けさせるために感染者数を操作している。

(2) 実験的ワクチンが接種したひとの免疫力を低下させ、ワクチンを接種すればするほど、感染者が広がる。

そこで本章では(1)「PCR検査の増幅回数を操作して、3回目の「ブースター接種」を受けさせるために感染者数を操作している」という問題について説明したいと思います。このことを説明するための最も良い文書を見つけました。

それは、ハンナ・ローズ弁護士や元ファイザー社の副社長・科学研究主任だったマイケル・イエードン博士らが、イギリス政府のボリス・ジョンソン首相やWHO(世界保健機構)のテドロス事務局長らの17人を、ICC国際刑事裁判所に提訴したときの文書です。

この提訴は二〇二一年二月六日付けの文書です。「国際刑事裁判所に提訴するにあたって」と題した次の訴状です。(しかし現在は削除されて読めなくなっています)

* BEFORE THE INTERNATIONAL CRIMINAL COURT (TREATY OF ROME STATUTE, ART. 15.1 AND 53)
file:///C:/Users/terashima/AppData/Local/Temp/Understanding_Cycle_Threshold_Cr_in_SARS-CoV-2_RT-PCR_.pdf

2

私がこの文書の存在を知ったのはオンライン誌『GlobalResearch』というで次の論考を
読んだからでした。

* Before the International Criminal Court (ICC), The Corona Virus "Vaccines". Nuremberg Code, Crimes

against humanity, War Crimes and Crimes of "Aggression" Treaty of Rome Statute, Art. 15.1 and 53

「コロナウイルス『ワクチン』の推進者を、ニュルンベルク綱領違反、人道にたいする罪、戦争犯罪、侵略の罪で、国際刑事裁判所に告訴、ローマ規定第15条1項および第53条」

<http://ummethod.blog.fc2.com/blog-entry-866.html> (翻訳NEWS]2022/04/03)

ここで「ワクチン」が括弧でくくられているのは、いま世界中で強制接種されているワクチンは、本来のワクチンではないという意味が込められています。

というのは、WHOが各国に進めてきたワクチンは今まで一度も使われたことのない遺伝子組み換えワクチン、きちんとした臨床試験を終えていないので、EUA(緊急使用許可)としてしか認められていないものだからです。

したがって安全性も有効性も確かめられていません。事実、各国機関に報告されている有害事象も血栓症など多種に及んでいます。前章で紹介した「足を切断しなければならなくなつた」という事例も、その一例にしかすぎません。プロのスポーツ選手が試合中に倒れて死ぬという例も激増しています。

このような、実験的ワクチンによる惨禍は、ナチスの戦争犯罪を裁いた裁判では「医者による人体実験」として裁かれ、それが「ニュルンベルク綱領」という医療倫理条項となつ

て結実したことも、以前の章で紹介しました。

3

さて、政府は「コロナ感染者が拡大している！」という恐怖作戦で、国民を実験的ワクチンに追い込み、外国から輸入した高価な経口薬を飲ませようとしてきたわけですが、その宣伝の道具として使われてきたのがPCR検査です。

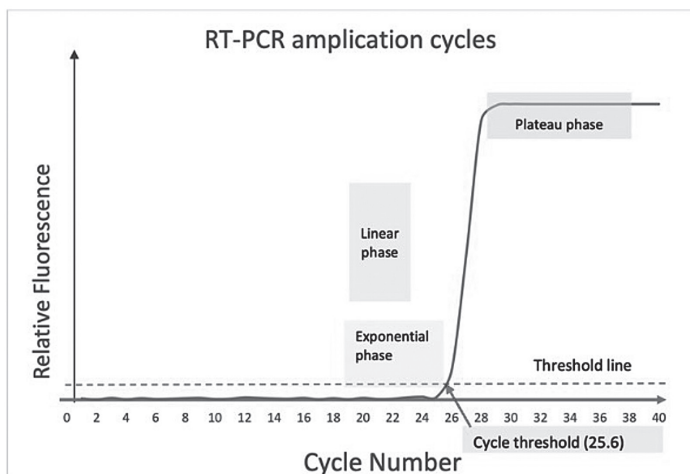
したがって上記のICC国際刑事裁判所に提訴された訴状では、このPCR検査についても鋭い追求がされています。それを先述のオンライン誌『GlobalResearch』の記事は、訴状の一節を引用しながら、次のように説明しています。(和訳は寺島)

PCR検査

オックスフォード大学の Centre for Evidence-Based Medicine のレビュー(付録2)によると、標準的なPCR検査は非常に感度が高すぎて、死んだウイルス細胞の断片さえも拾い上げてしまう。だから、過去にかかった古い感染症さえも検出する。

元来、生物試料中のDNAやRNAの存在を検出するために開発されたものであるが、ノー

Figure 1 demonstrates the stages for RT-PCR post run analysis.



イギリス公衆衛生局による
PCR検査の閾値は「25.6」

ベル賞を受賞した発明者キャリー・マリスでさえ、PCRは決して病気を診断するためのものではないと明言している。

PCRは単に特定の遺伝物質の存在を検出するものであり、それは感染を示す場合もあれば示さない場合もある。キャリー・マリス博士が言うように、PCR法は誰にでも、ほとんど何でも見つけることができる。

PCR検査では、増幅サイクルを用いてウイルスRNAを検出する。サンプルは化学的に増幅され、検出できるまでRNAのコピーを増やすことが繰り返される。

増幅の「サイクル」ごとに、サンプル中の分子数は2倍になる。十分なサイクルを実行すれば、どんな物質からでも分子1個すら見つけることができる。

イギリス公衆衛生局(PHE)の方針では、サイクルの閾値は約25.6であるべきで、もし検査器がサンプルを検査の検出限界まで持っていくために25から35サイクル以上で実行しなければならぬなら(付録2a)、そのサンプルには臨床的に問題となるほどのウイルスが含まれていないことを確認している。

我々は、情報公開請求により、イギリスでは増幅回数を40〜45回にして検査がおこなわれているという情報を得た(付録3、3a、3b、3c)。これでは、元の試料にコロナウイルスRNAが全く存在しなくても陽性となる可能性が高くなり、役立たない。

さらに問題なのは、PCR検査は全く信頼できないだけでなく、発癌性のあるエチレンオキシドを含んでいる(付録4b)。

上の説明の中に散見される(付録2)(付録2a)とか(付録3、3a、3b、3c)(付録4b)という数字は、先述の6頁にもおよぶICC提訴文書の末尾に付けられた「付録の資料番号と引用リンク」を示しています。

本文を読んで、その主張を疑問に思ったひとは、その根拠を該当の資料や引用リンクを読むことで、検証できるようになっています。

政府やWHOは実験的ワクチンに疑問を呈する人たちを「陰謀論者」として扱い、ときには職を奪うことさえしていますが、この膨大な資料を読めば、ICCへの訴追に踏み切った人たちが、十分な科学的根拠をもとにして行動していることが分かるはずで

それはともかく、上記のPCR検査の説明を読むと、およそ次のことが分かるはずで

(1) PCR検査が、コロナ感染者を発見する手段としては、いかに正確なものであるかを、世界一流の大学とされているオックスフォードが研究している。

(2) なぜなら、PCR検査の増幅回数を充分に増やしていけば、どんな物質からでもウイルスの残骸1個すら見つけることができるからだ。

(3) したがって感染者を増やして国民の恐怖感を高めなければ、PCR検査の対象人数を増やし、増幅回数(Ct値)を思い切り高くしさえすればよい。

(4) ノーベル賞を受賞したPCRの発明者キャリー・マリスでさえ、PCRは決して病気を診断するためのものではないと明言している。

(5) イギリス公衆衛生局も、「感染者を発見するためにCt値を25以上で実行しなければならぬなら、その地域や施設には臨床的に問題となるほどの患者はいないことになる」と認めている。

ところが恐ろしいことに、『謎解き物語3』の「終章」で詳述したように、日本では相変

わらずCt値を「40」にしていきました。私が電話で確認したかぎりでは、Ct値を「50」にしているところまでありました。

これでは、日本のコロナ騒ぎは永遠に終わらないことになります。

他方、政府にとつては、外国から輸入した高価な実験的ワクチンも経口薬も、「賞味期限」が切れたら廃棄処分にはせざるを得ません。その例も『謎解き物語3』で書きました。

イスラエルのように世界に冠たるワクチン推進国でも、最近、8万回分にもおよぶワクチンの大量廃棄処分をおこなっています(26～27頁)。巨大製薬会社との契約では、WHOの指導の下でいったん契約したら、余っても返却は許されないことになっているからです。

このおそろしい契約についても前掲書に書いたので参照いただければ幸いです。

というわけで、本章の冒頭で書いた「ワクチンを2回接種したにもかかわらず、なぜ感染者が増えるのか」という次の二つの理由のうち、最初のものにたいして一応の回答を書いたつもりです。

ではワクチンを2回接種したにもかかわらず、なぜ感染者が増えるのでしょうか。それには二つの理由が考えられます。

(1) PCR検査の増幅回数を操作して、3回目の「ブースター接種」を受けさせるために感染者数を操作している。

(2) 実験的ワクチンが接種したひとの免疫力を低下させ、ワクチンを接種すればするほど、感染者が広がる。

そこで、次節は上記(2)の謎解きに挑みたいと思います。

〈本節のキーワード〉

ハンナ・ローズ (Hannah Rose, 弁護士)

マイケル・イエードン (Mike Yeadon, 元ファイザー社の副社長・科学研究主任)

ICC 国際刑事裁判所への提訴、ニュルンベルク綱領、ローマ規定

PCR検査の「閾値」^{いき}、「増幅回数 (Ct値)」

オックスフォード大学の Centre for EBM (Evidence-Based Medicine)

イギリス公衆衛生局 (PHE: Public Health England)

キャリア・マリス (ノーベル賞を受賞したPCR検査の発明者)

第2節 イギリス健康安全局「ワクチンは免疫力を永遠に奪う」

1

前節では、次の「二つの理由」のうち(1)についての謎解きを書きました。

ではワクチンを2回接種したにもかかわらず、なぜ感染者が増えるのでしょうか。それには二つの理由が考えられます。

(1) PCR検査の増幅回数を操作する。

(2) 実験的ワクチンが接種したひとの免疫力を低下させ、ワクチンを接種すればするほど、感染者が広がる。

さて、そこで上記(2)の謎解きに挑みたいと思うのですが、この回答については、実は『謎解き物語3』で既に大半の回答を出してあります。というのは、その第4章は次のよ

うになっていたからです。

第1節 ワクチンが感染者を増やしている!?

第2節 ワクチン接種後のイスラエルの驚くべき感染激増

第3節 ワクチンではなく早期治療こそ

これを読んでいただければお分かりのように、ワクチンは感染を防ぐどころか、感染者を増やしているのです。本巻第9章の冒頭グラフ(195頁)もイスラエルだけでなく日本も、ワクチン接種すればするほどコロナ感染者も増えていることを示しています。

2

政府やWHOの言い分は「ワクチンを2回接種すれば平常に戻る」でした。ところが現在、彼らは驚くべきことに、「変異株が出てきたから3回目のブースター接種を！」と言い始めているのです。

インフルエンザウイルスも次々と変異していくのですから、コロナウイルスも変異することは初めから予想されていたことでした。それどころか「実験的ワクチンは制御不能な変異株を産み出す恐れすらある」と警告する研究者すらいました。

ところが、ここに、もうひとつ衝撃的な事実を暴露する記事が出てきました。それはイギリス健康安全局（HSA）が思わず漏らしてしまった次のような情報です。

* If You Take the COVID Vax, You Can Never Achieve Full Immunity Again - Government Stats Unveil the Horrifying Truth「COVIDワクチンを接種したら、身体の免疫機能を完全に獲得することは絶対になくなる——政府統計が明かす驚愕の真実」
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-791.html>（『翻訳NEWS』2022/02/16）

この記事によれば、イギリス健康安全局の発行する『COVID-19ワクチン監視報告書』第42週の23ページで、「接種2回後に感染した人は中和抗体価が低いようだ」と認めているのです。しかも、「この抗体低下は基本的に永久的なものである」と説明しています。

つまり、ワクチンを2回打ったひとは、全くワクチンを打たなかったひとよりも免疫力が低下して、より感染しやすくなるというわけです。日本でオミクロン株の感染者が激増したのがワクチン接種率の激増と併行しているのは、このように考えれば、じゅうぶん納得できるように思えます。

そこで、さらに思い出されるのが、たまたま見つけた次の記事です。この記事は、拙著『謎解き物語2』を紹介してくれたデータマックス社のサイトに載っていたものです。

*【ただの風邪？】記者も感染。〴〵オミクロン株で2度の陰性判定から緊急入院

<https://www.data-max.co.jp/article/45805> (前)
<https://www.data-max.co.jp/article/45806> (後)

この記事を読んでみたら、上記サイトの記者が「ワクチンを2回も打っていたにもかかわらず、オミクロン株に感染してひどい目に遭った」という体験記が書いてありました。

3

すでに私は第2章で、「オミクロン株は感染力はあっても弱毒性のものだから少々の熱は出ても入院する必要がない」「これはオミクロン株の発祥地だとされる南ア共和国で実証済みだ」ということを書きました。

*オミクロン変異株は本当に脅威なのか——弱毒株を強毒株に変えるみことな方法

ですから、上記の記者も入院する必要はなく、すぐに回復するはずだったのに、なぜ約1週間の隔離病棟を経て自宅療養に移ることになったのか不思議でした。

そこで上記サイトの編集部に電話をして「この記事を書いた記者はワクチンを2回接種していたのではないですか」と尋ねてみました。すると案の定、「そのとおりです。2回接種していました」との返事でした。

だとすれば免疫力が低下していて、感染しやすくなっていたのも当然でした。

4

そこで念のために先述の記事を読み直してみたら、この記者自身が次のように書いていたことを発見しました。私が斜め読みして、丁寧に読んでいなかった箇所でした。

それから7日間をその病院内の居室に隔離されてすごした。3日目くらいから熱は下がり始めたが、何か特別な薬が処方されたわけでも、特殊な治療法を施されたわけでもなかった。ワクチンを2回接種していることも関係しているのか、ひたすら毎日の体調を記録し、熱が収まるのを待つ、ただそれだけである。解熱剤が処方されたものの、「つらいときに飲んでください」程度の扱いで、そういう意味ではオミクロン株はたしかに「単なる風邪」のように思えた。

右で、この記者は「ワクチンを2回接種していることも関係しているのか」と自問自答しているのですが、それ以上の深い追求をしていません。

そして「何か特別な薬が処方されたわけでも、特殊な治療法を施されたわけでもなかつ

た」「ひたすら毎日の体調を記録し、熱が収まるのを待つ、ただそれだけである」と、病院側の対応に不満を述べているだけでした。

そしてたどり着いた結論は次のようなものでした。

解熱剤が処方されはしたものの、「つらいときに飲んでください」程度の扱いで、そういう意味ではオミクロン株はたしかに「単なる風邪」のように思えた。

つまり、病院側も、オミクロン株を単なる「単なる風邪」として扱っているように読み取れます。それとも、この「ワクチンを2回接種している」のだから、それ以上の治療は要らないという姿勢だったのでしょうか。

いずれにしても、この記者も病院側も、ワクチンを2回接種すると免疫力が低下し、感染しやすくなるという研究が、イギリス政府の内部文書にあったことを知らなかったことだけは確かです。

この記事は、上記に続けて次のように書かれていました。退院する間際の、病院側の対応について書いたものです。

少し声が出始めたころに担当医師と話したが、たとえば何かの数値が低くなったら完全に治りましたと判断するわけではなく、発症から10日が過ぎたら他人に伝染することはないという判断で対応しているという。

あまりにもおおざっぱな診断基準で驚いた。陽性反応のまま退院する人も多いといい、それでも他人に伝染すほどのウイルス量ではないので安心なのだという。

「もうオミクロンにかかることはないですが、早いうちに3回目のワクチンを打ってください」とアドバイスも。

この最後の病院側のアドバイス「もうオミクロンにかかることはないですが、早いうちに3回目のワクチンを打ってください」を読むと、恐ろしくなります。「ワクチンを打てば打つほど免疫力が低下すること」を医療当事者が知らないからです。

それどころか、先述のイギリス政府の内部文書は、「ワクチンは人間が本来持っている

自然免疫力を永遠に奪うことになるかもしれない」「実験的ワクチンを受けたら、二度と完全な免疫力を得ることはできない」と言っているのですから。

6

ここで思い出されるのは、CDC（アメリカ疾病管理予防センター）や巨大製薬会社ファイザー社の科学者自身が、「ワクチンで得た免疫」よりも、コロナウイルスに感染して得た「自然免疫」の方が良いと思っっているという事実です。

次の二つの記事は、そのことをよく示しています。

* Natural COVID Delta immunity more effective than vaccination - CDC study

「デルタ株に感染したことで獲得した免疫は、ワクチンによる免疫よりも効果がある」——CDC発表
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-777.html>（『翻訳NEWS』2022/02/02）

* 'Run on COVID money': Project Veritas VIDEO claims to show Pfizer scientists privately promoting 'natural immunity' to virus 「ファイザー社の経営はワクチン収益が頼り」：プロジェクト・ベリタスのビデオ映像が伝える真実—ファイザー社の科学者たちは個人的には「自然免疫」が良いと思っっている

<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-681.html>（『翻訳NEWS』2021/10/11）

まず最初の記事によれば、デルタ株が急増している際におこなわれた研究ですが、C Dは二〇二一年一月一日に、次のような事実を発表しているのです。（傍線は寺島）

デルタ株がコロナウイルスの主要な株となる中で、ワクチン接種済みの人々は、ワクチンを接種していない人々と比べてCOVID-19に罹患する確率は6分の1ほどだった。

しかし、初期のコロナウイルスの株に感染していて、ワクチンを接種していない人々は、15倍〜29倍ほどウイルスに感染しにくくなっていることも分かった。

入院率についても同様のことが当てはまり、感染によって得られた免疫は、ワクチンにより得られた免疫よりも、入院を防ぐことが分かった。

つまりコロナウイルスに感染して得た自然免疫力は、ワクチンを接種したひとより、15倍〜29倍ほどウイルスに感染しにくくなっているのです。

だから、ワクチンを接種していなくても、コロナウイルスに感染して得た自然免疫力は、

入院すら必要としないからを、私たちに与えてくれるわけです。

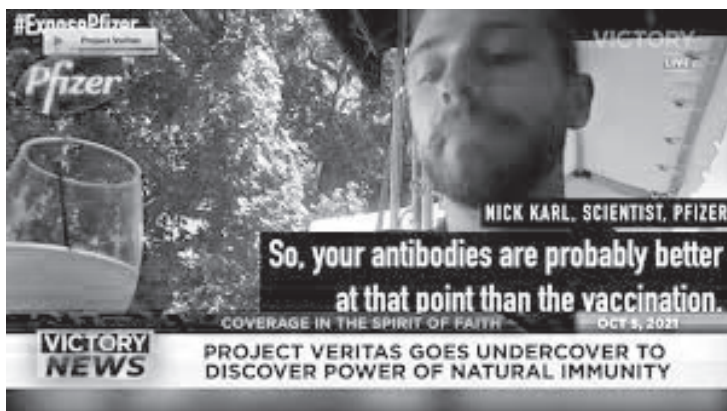
だとすれば、私たちは、手洗いやマスクや社会的距離という手段で、コロナ感染から自分を守る必要があるのでしょうか。

これにたいしてアメリカの医療当局は、「この研究はデルタ株が急増している際におこなわれたものであり、いま猛威を振るっているオミクロン株にたいするワクチンの効果についても同じ考察があてはまるわけではない」と必死に自己弁護を図ろうとしています。

しかし、この記事によれば、バイデン大統領首席医療顧問であるアンソニー・ファウチ博士は、共和党の議員から、次のような鋭い追求を受けています。

ファウチが自然免疫の効果を強調する論文を無視してワクチン効果を主張するのは、「すべての国民に実験的ワクチンの強制接種をおこなう」というファウチの計画を台無しにしてしまうからだ。

これを読むと、今まで右翼・保守的だと思われていた共和党が、左翼・リベラルだと思われていた民主党よりも民主的で、巨大製薬会社の利益を代弁する民主党と闘う姿勢を示



ファイザー社の科学者ニック・カール。
「自然免疫はどんなワクチンよりも、おそらく優れている」

していることとなります。くり返しになりますが、今までの常識では理解し難い状況です。

8

先に紹介した二つ目の記事は、アメリカの保守系メディアであるプロジェクト・ベリタス社が公開したビデオ映像です。ここにはファイザー社の3人の科学者が登場しています。

*「ファイザー社の経営はワクチン収益が頼り」…プロジェクト・ベリタスのビデオ映像が伝える真実、ファイザー社の科学者たちは個人的には「自然免疫」が良いと思っている

<http://innmethodblog.fc2.com/blog-entry-681.html>【翻訳NEWS】2021/10/11

最初に登場したニック・カール(Nick Karl)と名乗る科学者は、次のように語っています。

ウイルスに対する「自然免疫」はどんなワクチン接種よりも「おそらく優れている」。

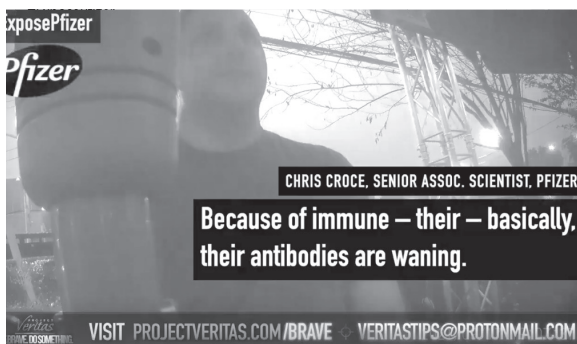
かつて私はワクチン接種の義務化は良いことだと考えていたが、今は、ニューヨーク市政の目的は、何よりも、ワクチンを接種していない人の生活を「不便」にすることだと思うようになった。

ワクチンを受けていない人が困り果て、「こん畜生！受けるよ！これでいいんだろ？」と口走るくらいのところまで文字どおり追いつめることが目的なんだ。

つまりカール氏は、昔はワクチンが良いと思っていたが、今は自然免疫の方がよいと思っているのです。にもかかわらず彼の勤務するファイザー社は、為政者と一体になって、市民をロックダウンに追い込みワクチンを受けざるを得ない心境に追いつめようとしているというわけです。

9

ビデオに登場したもう一人の人物は、上級研究者のクリス・クロッチェ(Chris Croce)でした。彼は次のように語っています。隠し撮りなので顔がはっきり見えませんが。



ファイザー社の上級研究者クリス・クロッチェ
「ワクチン免疫は長続きしない。要するに我が社は悪徳企業なんだ」

申し出ている、というわけです。

言い換えれば、3回目のブースターショットは、変異株が出てきたからではなく、ワクチンの効果が自然免疫よりも長く続かないからだと、研究者自身が分かっているの

コロナウイルスに感染したときに作られる抗体は、ワクチンよりも「長く」保護してくれる。

我がファイザー社は、自社のワクチンの効果を高めるためのブースターショット（追加接種）をすでに申し出ている。

アメリカ食品医薬品局（FDA）は最近、高齢者や健康リスクの高い人々への追加接種を推奨した。他社のワクチンも、近々ブースターショットを導入する可能性がある。

ファイザー社はコロナ騒ぎを利用して金儲けをしている。要するに我が社ファイザー社は「悪徳企業」なんだ。

つまりコロナに感染して得られる自然免疫は長続きするが、ワクチンの効果は長続きしない。だからこそ、自社のワクチンの効果を高めるためのブースターショット（追加接種）をFDAに



ファイザー社の科学者ラウル・ハンドケ
「長時間のセミナーのことは社外禁だと言われたんだ」

です。

結局、ファイザー社はコロナ騒ぎなしでは生き延びることのできない「悪徳企業」なのだということを、そこに勤務している研究者自身が、ビデオの映像のなかで語っていたのでした。

10

さらに、ビデオに登場した3人目の、ラウル・ハンドケ(Rahul Khandke)と名乗る人物は、会社による従業員の訓練、いわゆる「セミナー」について次のように語っています。

私たちがしっかり教え込まれたのは、「コロナに感染するよりもワクチンを打った方が安全だ」という類たぐいのことだ。こうして自分の頭で考えることなどできなくなる。まあ、何時間も座って耳を傾けなければならぬからね。

そして言われたのは次のことだ。「このような訓練を受けたことを社外で話してはならない」

<https://www.rt.com/usa/536666-project-veritas-pfizer-covid19-vaccine/>

つまり、このビデオで彼は、「一方的な情報のみを国民に伝える方法を社員に教え込むセミナー」があったことを暴露しているわけです。

このようなビデオが存在すること、そしてそういうことを彼らに語らせる取材によくぞ成功したものだ、驚きの念を禁じ得ません。

しかし、いずれにしても、この映像は、政府やWHOが私たちに語っていることがいかにも嘘に満ちたものであるかということをお教えてくれました。

したがって、いま政府がオミクロン株について私たちに語っていることも、よほど心して聞かねばなりません。さもないと何処に連れて行かれるか分かりません。

ワクチンは「効かない」どころか「大量の有害事象・ワクチン死」をもたらししているのですから。

11

オミクロン株については、南ア共和国のオミクロン株への対応を思い出します。私は先に紹介したつもりでしたが（本書第2章）、それは他の記事と併せての紹介でしたから、あまり皆さんの印象に残っていないかも知れません。



バリー・シャープ博士(ワクチンに関する大臣諮問委員会委員長)がオミクロン株を発見した南ア

そこで、南ア共和国のオミクロン株への対応だけに絞って、その記を以下に再録しておきます。

そもそもオミクロンなどという変異株は南アフリカ共和国で発見されたものです。

が、その変異株を発見したバリー・シャープ博士(南アのワクチンに関する大臣諮問委員会委員長)自身が、この変異株は「弱毒」で何ら恐れることのないものだと言っているのです。これは南ア医師会の会長アンジェリック・カチア博士も、全く同じ意見でした。

(c) Doctor Who First Discovered Omicron Variant Says It's "Mild." Hasn't Caused Uprick in Hospitalizations. Another medical chief says "we haven't admitted anyone" to hospital

(オミクロンという変異株を最初に発見した博士は言っている。「これは『弱毒』で入院者の増加をもたらしていない」。南ア医師会会長も言っている。「オミクロン株による入院患者は誰もいない」)

<https://www.globalresearch.ca/doctor-first-discovered-omicron-variant-says-mild-hasnt-caused-uprick-hospitalizations/57632560>

By Paul Joseph Watson, December 01, 2021

だからこそ、オタワ大学名誉教授のミッシェル・チョストフスキー博士も、「これは新しい国民抑圧政策を導入するための口実だ」と言っているのでしょうか。

(4) The COVID-19 Omicron Variant: Towards a Fourth Wave Lockdown? Pretext to Introduce



南ア医師会会長アンジェリック・カチア博士。シャウブ博士と同じく「オミクロンは弱毒だ」

New Repressive Policy Measures (オミクロン変異株…第4波のロックダウンを強制するためなのか？これは新しい国民抑圧政策を導入するための口実だ)

<https://www.globalresearch.ca/the-covid-19-omicron-variant-towards-a-fourth-wave-lockdown-pretext-to-introduce-new-repressive-policy-measures/5762859>

何と驚いたことにWHO自身が今や「オミクロン株は『超弱毒』だ」と言い始めているのです。オミクロン株は感染力が強いだけでなく猛毒だと言っていたことの嘘がバレ始めてきたからに違いありません。次の記事はそのことをよく示しています。

(5) The Omicron Fraud. The WHO Now Says It's "Super-mild"

(オミクロン詐欺：今やWHOも言う、それは「超弱毒」だ)

<https://www.globalresearch.ca/the-omicron-fraud-the-who-now-says-its-super-mild/5763772?print=1>

ところが日本政府も、この詐欺を真に受けて国民に新しい抑圧政策を受け入れさせようとしています。

他方、オミクロン株の発祥地だったはずの南ア共和国では、オミクロン騒ぎの最中なのに、コロナによる入院率は急落し、政府がコロナによる隔離政策を中止するよう各州に言い始めているのです。

隔離政策は経済を停滞させ、多くの企業倒産を産みだし、国民に失業などの苦しみを与えて

きたから当然のことでしょう。しかし、イベルメクチンの使用を禁止して、このような政策を率先しておこなったのは政府自身なので、奇妙な話です。

(6) South Africa's hospitalization rate plunges amid Omicron wave

(南ア共和国では、オミクロン騒ぎの最中なのに、コロナによる入院率は急落)

<https://www.rtl.com/news/543477-south-africa-COVID19-omicron-strain/> 17 Dec. 2021

(7) South African govt advised to stop COVID quarantine

(南ア政府が忠告、コロナによる隔離政策を中止せよ)

<https://www.rtl.com/news/543806-south-africa-no-COVID-quarantine/> 20 Dec. 2021

南アがこのように変化し始めているのに、日本政府および政府に助言しているはずの研究者たちは、いったい何を研究しているのでしょうか。

〈本章のキーワード〉

イギリス健康安全局(HSA)

「ワクチンは免疫力を永遠に奪う」(HSAの『COVID-19ワクチン監視報告書』第42週)

変異株を発見したバリー・シャウブ博士(Barry Schoub, ワクチンに関する大臣諮問委員会委員長)

南ア医師会の会長アンジェリク・カチア博士(Angelique Coetzee)